

気づいたときには

石川宏千花

絵 中原いゅん子



加藤律子はデブだ。

最近、デブという単語を口にする白い目で見られたり、速攻で先生に注意されたりする。だから、いまは頭の中でだけ、加藤はデブだ、と思っている。

最後に直接、加藤にその単語をいったのは、もう二年も前、四年生の夏休みだ。近所のスーパで、ばったり会った。そのときの加藤が、学校には着てこないような肩ひもの細い赤のワンピース姿だったので、なんかひどいこといいたくなってしまうって、吸った息を吐くようにいったのだ。おまえってほんとデブだよなって。

加藤は、爆笑しながらいった。

「前から思ってたけど、遠藤くんってむかしのおじさんみたいだよな。班の子にも平気でバワハラするし」

むかしのおじさんみたい——。

生まれてはじめて面と向かっていわれた悪口だったことに加えて、一瞬、意味が飲みこみにくかったこともあって、オレはなんのリアクションも取れず、ぼうっと加藤の顔を見ていた。『あれっ、こいつ顔だけはあんま太ってなくない？』そんなことを考えながら。

そして、六年生になったいまも加藤とは同じクラスで、オレはまだ、加藤はデブだ、と思っている。変わったのは、口には出さずに頭の中で、という部分だけ。

なんなら、最後に直接デブだといったあの日よりむしろに、そう思うようになった気がする。あいつをデブだと思わなくなったらオレの負け。なぜだかそんな気がして、意地でも加藤をデブだと思うのをやめられなくなっていた。